

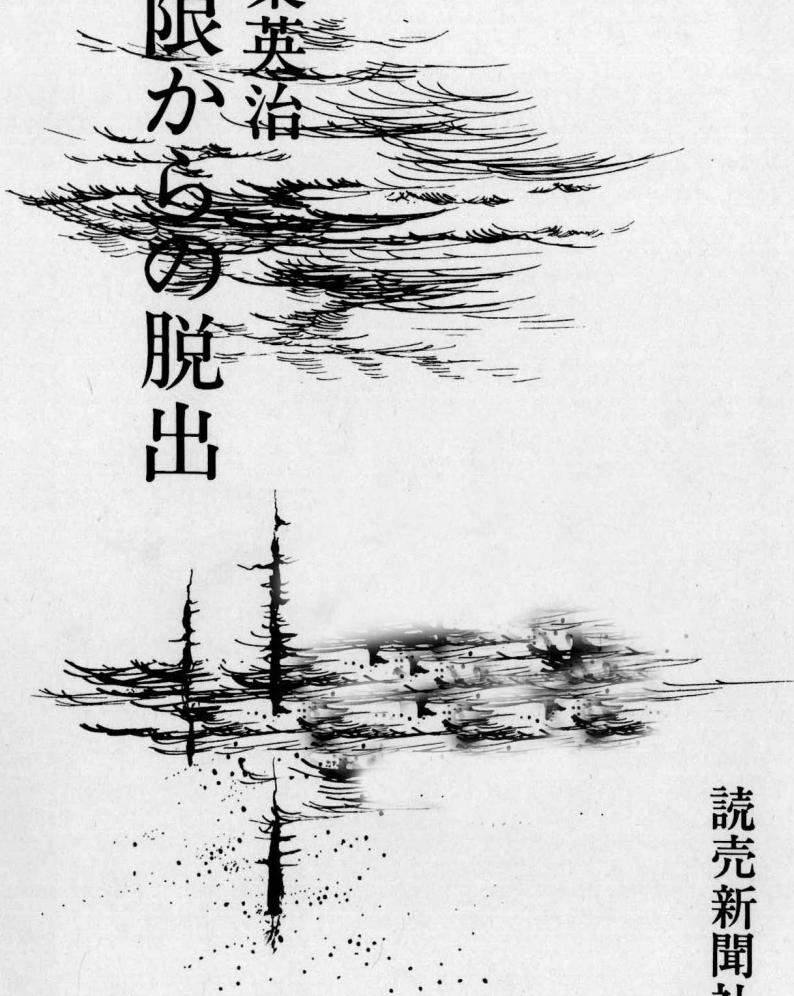
極限からの 脱出

榛葉英治

読売新聞社

極限からの脱出

榛葉英治



読売新聞社

著者紹介——— しんば・えいじ

大正元年10月静岡県生まれ。昭和12年早大英文卒，同15年渡満，満洲国外交部調査科を経て応召，22年帰国。丹羽文雄門下生として10年間苦闘を続け，D・H・ロレンスの影響を受けて代表作「渦」「淵」「流れ」の三部作を完成，本編の一部を書いた「赤い雪」で33年上期直木賞を受賞。

(現住所＝東京都板橋区向原 1—4—8)

きょくげん
極限からの脱出
だつしゅつ

昭和四十六年八月一日 第一刷

著 者 しんば・えいじ
榛葉英治

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三の二の一 〒100
大阪市北区野崎町七七 〒550
北九州市小倉区明和町一の一 〒813

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 五六〇円

極限からの脱出

*目次

この一篇を満洲の引揚者に捧ぐ

一章	日本は敗ける	7
二章	兵の帰宅	40
三章	南嶺捕虜収容所	59
四章	脱出	86
五章	ながい冬	106

六章 長春市日本人会

136

七章 雲雀と苗

161

八章 二本の旗

183

九章 集中營

— 極限状況のなかで —

213

あとがき

240

装丁
難波
淳郎

極限からの脱出

——この一篇を満洲の引揚げ者に捧ぐ——

一章 日本は敗ける

一

昭和二十年の八月八日――

陸軍二等兵の木谷修三は内蒙の通遼という町で、ソ連の参戦を知った。

この砂漠さばくの町には満洲人と蒙古人が半々に住んでいて、蒙古馬の産地である。満鉄の駅では軍用の蒙古馬の積み出しがさかんにおこなわれていた。

木谷二等兵はこの駅に開設された「停車場司令部分遣所」に配属されていたのだ。所長の少尉のしたに伍長が一名、上等兵と二等兵が一名ずつという小さな分遣隊であった。

停車場司令部――略して「停司」と呼ぶ部隊の任務は、駅に駐屯ちゆうとんして軍用列車の運行をたすけることである。

だから木谷二等兵は腰にゴボー剣をぶらさげているだけで、鉄砲をもったことがない。調練や演習をやらされたこともなかった。まるで勤め人みたいな気楽な軍隊生活であった。

木谷二等兵の仕事といえば、蒙古馬を貨車に積み込む作業に立合ったり、軍用列車が通過するときには、将校用の弁当を、駅前の日本人経営の食堂に注文するというふうなものであった。列車の兵隊が何をたべていたかは知らない。

この鉄道は昭和の初めに、満洲軍閥の張作霖が満鉄線に対抗するために敷設したもので、戦争末期のこの頃、砂漠に置き忘れられたようなこの小さな駅も、軍用列車の通過であわただしかった。北支方面から満洲へ移動してくる部隊である。なかには机や椅子、鶏まで貨車に積んだ部隊もあった。

通遼の町の西北は砂漠である。町を出た草原には蒙古人の包もあった。地平線には砂丘が波頭のようにつづき、ときどきその砂丘に竜巻がおこった。それは舞台を横切る道化役者を思わせ、ネジリ棒みたいにキリキリと砂を巻き上げて空に溶けていた。

蒙古人の馬の扱い方は見事であった。原の方から町の道路を埋めて、小がらな蒙古馬を追いついてくる。

駅の貨物線がある原につれてくると、一頭ずつを貨車に上げる作業がはじまる。蒙古人は裸か馬にまたがり、手には長い棒をもっている。その先には輪がついていて、それで馬の首をひ

っかけるのだ。

土煙りのなかを、二頭の馬がしっ走する。ほかの馬の群はのんびりと草をはんでいる。

「……！」

蒙古語でかけ声をかけると、棒の先の輪は逃げる馬の首にひっかけられ、その馬はおとなしく曳かれてくる。

この町の駅で、馬の積み込みをのんびりと見物している木谷修三には、沖繩の戦闘も、本土への空襲もひどく遠いものを感じられた。

通達は「炭疽病」の汚染地区でもあった。牛や馬の伝染病で、これに感染した人間は助からないといわれている。この「文化果つる」町にいま駐屯している日本軍は工兵隊だけで、苦力を使い砂漠の方に自動車の軍用道路を造っていた。戦略的には見棄てられた町である。

こんな駅に派遣された理由を、木谷修三二等兵は察していた。彼は隊の将校や下士官から憎まれていたのだ。

それは彼がみんなの前で、「日本は敗ける……」といったからである。

三カ月まえのことだ。ここからずっと東にさがった鄭家屯という駅に、「第四七停司」の本部が開設された。町の料亭で宴会があった。二等兵も出席するのだ。床の間を背に司令官の中佐がすわり、将校連中がずらりとならんだ広間の末席には、木谷二等兵もすわって飲んでいた。

酔った木谷は隣にいる上等兵としゃべっているうちに、つい口をすべらした。

「日本は敗けるよ。おれたちの任務も終りだな……」

上等兵はこのことを、便所かどこかで将校の一人に話したらしい。

「なに、日本は敗ける？ そんなことを言う奴をここへ出せ！」

広間は大きわぎになった。酔った将校連中は木谷を座敷のまん中に引張り出し、さんざんになぐり、なかには、

「斬る！」

と軍刀を抜き、抱きとめられる少尉もいた。

「非国民だ。憲兵隊につき出せ」

と息まぐ将校もいた。

兵隊どうしの部屋で眠ってから、木谷は顔が腫^はれぼったいのと、頭がズキズキ痛いので目をさました。

彼は隣にねた一等兵を起して聞いてみた。

「おい、おれは昨夜、何かしたのか？」

一等兵はアクビをして、おしえた。

「何かどころじやないぞ、木谷……。おまえは、日本は敗けるなんて言やがったもんだから、

将校連中にひっぱたかれたんだぞ」

「そうか。それならいいよ」

木谷は起きて、洗面所でタオルをしぼってきて、顔を冷やした。そう聞けば、そんなことを言った記憶はあった。自分はほんとのことを話したので、すこしもはずかしいことはないと考えた。

つぎの日、頬の腫れた木谷を見て、間の悪そうな顔をする将校もいた。べつの将校はけわしい眼で、二等兵を見た。

将校にも下士官にも、この二等兵は変った奴だという印象をあたえたらしい。奥地の分遣所へ派遣する要員のなかに、木谷二等兵はいれられたのである。

通遼分遣所の勤務はのんびりしていた。少尉は「日本は敗ける」といった兵隊も、ふつうに扱った。

通遼停司の将校以下三人は、駅に近い満鉄の寮に泊っていた。

その二階の窓からは、月に光る砂漠の砂丘がみえる。波頭のようにどこまでもつづいている。それを眺めていると、「おれも、地の果にきたもんだ……」と木谷修三はつぶやいた。

木谷修三はこの年の冬に召集になった。

彼は満洲国の官吏で、外交部という役所で国際情勢の調査の仕事をしていた。役所にはスペイン駐在の総領事館から、英国やアメリカの新聞雑誌が送られてきた。それを読む彼は日本の新聞の大本營発表よりも、英米の新聞報道のほうを信用していた。

役所で米軍のノルマンディ上陸作戦の映画をみたことがある。これはマドリッドからシベリヤ經由で帰国した領事がもち帰ったフィルムであった。

英仏海峡の海岸を埋めたアメリカ軍の上陸用舟艇、爆撃と艦砲射撃の物量作戦、波打ちぎわで倒れても後から進撃してくるアメリカ兵を映画でみた。この米軍に竹槍でたち向うという日本の敗戦を、彼が予想したのは自然であった。

いや、これは木谷だけではない。その頃、世界のうごきを知っていて、常識のある日本人なら、ドイツとイタリアが敗けた現在、日本に勝目があるとみる者はいなかった筈だ。そのほかの国民は真実を知らされないで、神州不滅とか本土決戦、一億総玉砕とかいう狂気としか思えない掛け声に理性を失っていたのだ。日本軍は最後には満洲に立籠^{たさこ}って米英軍と決戦をする

いう話さえも流れていた。

宴会の席で、彼が「日本は敗ける……」と口をすべらしたのは、木谷二等兵にとってはあたりまえのことだったのだ。

木谷修三はもともと官吏志望ではなかった。小説を書きたくて、W大学の文科にはいった。

昭和十一年の卒業の頃は、深刻な就職難時代で、内地での就職はあきらめ、叔父をたよって大連へきた。ここで二、三の仕事を転々したのちに、満洲国の官庁に採用されたのだ。

官吏生活二年目に結婚をした。妻の和代は奉天の女学校で、家政科の教師をしていた。役所の同僚の細君から、その同級生を世話されたのだ。

新京の南郊外にある進化街という官舎街に住んだ。この新しく建設された町には、女学校も購買組合も、郵便局もある。

二階建ての長屋がコの字型に並んでいて、官舎は八畳、六畳、三畳の三間で、浴室、暖房つき、便所は水洗だ。

この官舎での新婚生活は楽しかった。やくざな文学青年で、大連ではバーやダンスホールに入り浸っていた修三は、結婚してからはまっすぐに家へ帰った。もっとも街では、だんだん酒が飲みにくくなった。たまに役所の宴会でもあると、電車の停留所から原のなかの道路を、大声で大学の校歌をうたって帰った。

雪の道でころび、雪だらけになって家のドアを開けたこともある。

まじめな官吏になった木谷修三は、安月給のなかから本を買い、官舎の二階の書棚にならべるのを楽しみにしていた。勤めのいっぽうで、新京や大連で出ている新聞や雑誌に、文芸評論や「思想的な」評論を書いていた。

評論家として、いくらか名前も知られるようになった。二年目に長男が生れた頃には、役所から、成績優秀だということで特別ボーナスをもらったくらいだ。

電車通勤は混むので、原や丘をつきつて四キロはなれた役所にかよう木谷修三は、毎日がたのしかった。

日曜には、近所の人たちと同じに、家の裏に妻と二人で家庭菜園をつくった。

外交部の調査科では、三枝慎介科長の発案で、毎月二回、定例の情報研究会が開かれていた。この秘密会には、関東軍の尉官クラスの参謀課員も、政府からは弘報処の事務官も出席した。

この会で、木谷修三属官は「分析発表」をしたことがある。アフリカ戦線でのドイツ軍は補給路を絶たれて敗けるだろうと想定したのだ。

散会になり会議室を出てゆくときに、若い大尉が木谷の肩をたたいた。

「いやあ、いまのあなたの分析には敬服したですよ。もっとどしどし情報を送ってください」

その頃、ヨーロッパの在外公館から送られてくる暗号電報のなかでは、ハンブルグ総領事館